

IV―⑤ 教職大学院の指導教員併任と実践システムの確立(小中特)

1 現職派遣院生の探究実習

香川県教育委員会からの現職派遣の大学院生が、附属学校の教育実習の場を研修のフィールドとしている。教育実習期間の9月に附属学校を訪れ、附属の教員が実習生を指導している中、自身の授業力向上につながるノウハウや若年教員に対する指導スキルを学び、置籍校での指導に活かすことが目的である。

<(1) 研修生の声>

これから教員を目指す学生を指導することの楽しさ、やりがいと共に、難しさも学べた。附属の先生は学習指導要領を大切に、模擬授業で具体的に指導していることがとても参考になった。また、自分が指導したことが学生に伝わらないこともあり、置籍校にもどって若手教員を指導する際には伝わりやすくを大切にしたいと感じた。

・授業における発展的な学びの教え方と基礎基本の教え方の両方を丁寧に教えていただいた。また、実習生による多くの授業を参観することができ、附属学校の生徒は教師の問いかけに対する反応が良いため、どのような発問をすれば、どこまで深まっていくのかなど、より良い授業に向けた工夫の在り方を学ぶことができた。

・実習生の授業に対する討議会では、附属の先生から、授業をより良くするために実習生にどのように伝えればよいのかを学んだ。指導者側から助言をしていくばかりでは伝わらない。心に響かず自分のものにならない。実習生の思いをじっくりと語らせ、そこに入り込んで話をしていくことが大切である。言うより聞き出すことの大切さに気づき、後半からは、実習生への助言の仕方が変わっていった。公立学校に戻ったとき、若年の先生への指導にぜひ活かしていきたいと思った。

<(2) 実習生の声>

模擬授業、グループ討議、生活指導すべての面で指導していただきありがたかった。特に、模擬授業では、発問の仕方、授業の構成、板書の構成など細かくアドバイスいただいた。附属の先生と公立校の先生2人の意見を聞くことができ、益々、教育への意欲が高まった。

<(3) 附属教員の声>

・附属教員が実習生に話したことを、現職院生が経験した同様な場面で重ねて話したり、実際に公立校で困っていることを話してくれたりしてよかった。放課後の陸上の練習や運動会の練習など多忙の折に学生に的確な指示をしていただき助かった。

・実習生の授業づくりに対する迷いや戸惑いに対して相談したり、授業後の討議会に参加して助言をしてくれたりと熱心に取り組んでくれた。最初は、実習生への助言が難しいと試行錯誤していたが、後半になると助言の仕方が良くなり、実習生は具体的な改善案を自ら語り始めるようになった。



<グループ討議に参加して>



<実習生の模擬授業を指導する現職院生>



<附属教員の授業づくりのノウハウを直接学ぶ>



<授業討議会で実習生とともに意見交換>

2 ストレートマスターの授業開発実習

ストレートマスター(M1)の大学院生が、附属学校に毎週金曜日、終日在校し、附属教員の指導を受けながら現場研修(オン・ザ・ジョブ・トレーニング)を1年間続けている。附属学校で1年かけて学んだ実践知を、2年次には、県内公立校で同様な在校研修で活かし、更に磨きをかけることで、質の高い教員を養成することが目的である。

<(1) 研修生の声>

- ・1年間継続して附属学校で研修することにより、教育実習で学んだ授業づくりや学級経営について、更に深めることができた。具体的には子供の変容を捉えながら附属の先生のしかけと子供理解の方法を知ることができた。毎回、マンツーマンで話していただいていたありがたく感じている。2年次の公立校実習でも、更には教職についても附属の先生から学んだ方法は活用できるものである。
- ・授業実践が指導力の向上につながっており、授業をすることの自信がついてきた。特に、子供を見る視野が広がり、子供一人一人の反応を生かした授業ができるようになってきた。また、多くの授業を参観して、発問の仕方や子供との接し方など、毎回学ぶことが多い。そして、年間を通して子供とかかわることにより、子供の成長が実感でき、教師としての喜びを実感することもできている。

<(2) 県内公立小学校へ勤務する修了生の声>

附属の先生が学級の子供の指導を通して教えてくれた教師のしかけと子供理解の方法は、今のクラスでも使っている。困ったときには、附属でお世話になった〇〇先生ならどうするかと考えている。また、同じ県内なので、時々連絡をとりアドバイスをいただいている。大変ありがたい。

<(3) 附属教員の声>

- ・児童が下校した後、その日の授業内容や子供への関わり方等について、研修生と話をする時間を設けている。指導の意図や気になる子供の様子等について伝えることで、研修生はそれを生かして授業作りや子供への声掛けを行ってくれている。今後は配属学級だけでなく、様々な学年の授業を参観することで、発達段階に合った指導法についても学んでほしい。
- ・年間を通して、じっくりと授業研究ができ、指導力が着実に付いてきている。とにかく、子供とのかかわりを充実させることができるのが大きい。毎回子供と一緒に昼食を取ったり、休み時間も常に子供の近くでいたりすることで子供理解が進み、子供の良い点を見逃さずに見つけてほめるなど、理想的なかかわり方が普通にできるようになった。



<教育実習生の授業に対してアドバイスする大学院生>



<授業を通して学ぶ大学院生>